

昭和61年度発掘調査概報Ⅱ

茨木市教育委員会

は　し　が　き

原始・古代における私たちの町茨木市の周辺は、温和な気候に恵まれ、年中、四季おりおりの食物が豊かに実り私たちの祖先にとって豊かな生活環境が整っていたようです。この1年間の各種文化財の調査によって眠りをさまされた数多くの遺物が、古代の郷土のありさまを数千年の時を越えて私たちに語りかけ教えてくれています。

人々は、より豊かな生活を求めて身近かな小集団を形成するとともに、一方広い他の世界との交流をとおして物資の流通も行ってきましたようです。

先人の数多くの生活の痕跡からその生活の姿を知り学び取ってゆくことは、現代の社会や市民文化の成り立ちを理解する上でなくてはならない貴重な作業であると考えます。わが国の歴史を知り現代社会の構成基盤を理解する基礎とするため、この古代人からのメッセージを解説し発掘調査してきましたが、今ここに一つの報告書としてとりまとめ、多くの人々に伝えたいと思います。

文化財はたんに古いものとして貴重なのではなく、各種の歴史や伝承のタイムカプセルとして大切に保存し、理解するとともに私たちは次の世代に正しく伝承する義務を負うものと考えております。

最後になりましたが、調査にあたりご協力をいただきました関係各位に対して厚くお礼申しあげます。今後とも文化財保護の立場から鋭意努力してまいりますので、多くの方々の一層のご理解、ご協力、ご教示を賜りますようお願い申し上げます。

茨市教育委員会

教育長 中 平 敏

例　　言

1. 本概報IIは、茨木市教育委員会が昭和61年度中に開発行為等に伴なって実施した発掘調査概要である。
2. 発掘調査にあたっては、中条小学校遺跡は北國銀行株式会社、鮎川、耳原遺跡は大三建設株式会社、牟礼遺跡は辰己秀夫氏の依頼により、茨木市教育委員会事務局文化財調査員宮脇薰(嘱託員)が担当して実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は昭和61年度事業として行い、昭和62年3月に終了した。
4. 調査の実施と概報の作成にあたっては、桑原紀子、田中良子、早川博子、大戸井和江、土岐朱美、国分佐知子、森木芳子、峯松皓代諸氏の協力を受けた。
5. 本概報IIの執筆及び編集は、宮脇薰が担当した。

目 次

中条小学校遺跡 (86-1)	1
鈴川 遺 跡 (86-1)	9
牛 礼 遺 跡 (86-1)	14
耳 原 遺 跡 (86-1)	16

図 版

道路分布図.....	図版 I
中条小学校遺跡.....	図版 II・VI・IX～XII・XX～XXI
鈴川 遺 跡.....	図版 III・VII・XI・XIV～XXI
牛 礼 遺 跡.....	図版 IV・XV
耳 原 遺 跡.....	図版 V・VIII・XI・XXI

中条小学校遺跡（86—1）

第1章 調査に至る経過

北國銀行株式会社が、茨木市下中条町に既存の同社々宅を壊して、現在の社宅用地内で新たな社宅を建設することが計画された。

当地区は、中条小学校遺跡の北端部分にあたるところから茨木市教育委員会と北國銀行株式会社が協議を行い、既存の社宅を取り壊した後、昭和61年2月28日に試掘調査を実施した。

その結果、社宅のあった部分は、基礎および地中梁によって、上層の搅乱があり、遺物は出土するが包含層はすぐになく、地山と考えられる黄色粘土も大きく削られていた。しかし他の部分においては、盛土、耕土及び床土の下層に約30cmの弥生式土器・須恵器を含む茶褐色土の包含層を検出し、又遺構の存在が予想された。

その結果をふまえて、本教育委員会と北國銀行株式会社との間で再度協議を行い、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、今回の社宅建設により埋蔵文化財に支障が生じる範囲において実施することになり、駐車地及び緑地として支障のない部分は現状保存することになった。

発掘調査は、昭和61年4月1日から調査を開始し5月10日をもって終了した。引き続き4月1日から9月30日まで茨木市立文化財資料館において遺物整理作業を行った。

第2章 遺跡の環境

中条小学校遺跡は、茨木市下中条、西中条、新中条地域に広がる弥生時代から奈良時代にいたる複合遺跡である。

三島平野の西部、千里丘陵東端にあたり、元茨木川下流（現在庵川になり公園に整備されている。）の右岸に位置している。

付近一帯は交通至便のため早い時期から住宅地として開かれており、遺跡の全容は明らかにし難いものである。

その昔、この辺りは、下中条村であり摂津国鳴下郡内であった。昔は総持寺領で、のちに幕府領、明暦2年旗本板橋氏知行および幕府領、宝永年間からは旗本板橋氏知行および仙洞領であった。摂津高改帳による石高は、元和2年頃大田郡のうちとして446石余であった。

当中条村は、安威川の「一ノ堰」より水を引く安威川の右岸の桑原・安威・十日市・耳原・西河原・田中・倍賀・上中条・五日市・畠田とともに、安威川の左岸の「五社井堰」の宮田・富田・西五百住・赤大路（以上高槻市）・太田総持寺・中城とのあいだで、寛永2年、宝永6年、享保12年および文化6年から文政7年に大きな水争いをおこしている。

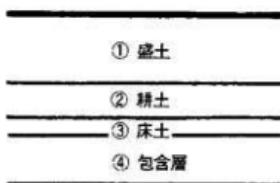
今回の調査地区は、中条小学校遺跡の北端に位置しており、北にある駅前遺跡と近接しており、また茨木川右岸に広がる郡遺跡、倍賀遺跡とも連なっているかの様相を示している。

また中条小学校遺跡の南へ一段低くなっているところに広がる、東奈良遺跡と共に本遺跡は、弥生時代中・後期の集落であるとも考えられ、弥生時代前期から中期・後期と続く東奈良遺跡との関係も考えなければならない。

第3章 遺構

層位は、上層から、盛土が40~50cm、その下層が約20cmの旧耕土、さらに約10cmの床土、そして、茶褐色土層の包含層が約30cmの厚さで堆積しており、包含層中には、弥生時代後期の土器及び須恵器・土師器が含まれていた。茶褐色土層の下層には黄色粘土が堆積している。

調査は、盛土、耕土及び床土まで



挿図一

の無遺物層を重機により除去した。その後、包含層及び遺構検出は人力によつて行つた。

今回の発掘により検出した遺構は、柱穴、溝、土壙及び井戸状の遺構である。

溝は、いずれも途切れた状態で検出された。

溝—I

調査区をほぼ南北に縦断する形で検出したが、北側部分はすでに削平されており、その全容は明らかでない。南側はさらに調査区域外へと続いているものと思われる。

巾が32cm～40cm、深さが3cm～6cmと浅いものであり、溝内は、暗褐色土の単一の堆積が認められた。

溝内の暗褐色土層中から、須恵器片が出土したが、細片で時期の確定は出来なかつた。

溝—II

調査区の南側を東北から南西にかけて斜めに横断するように検出した。

南西では断絶が認められ、東北においては調査区域外へ続いている。

巾12cm～22cm、深さ7cm～10cmと浅いものであり、溝内は、暗褐色土の単一の堆積が認められた。

溝内の暗褐色土層中から、須恵器片が出土したが、細片で時期の確定はできなかつた。

溝—Iは、溝—Iを切った状態で検出したので溝—Iより新しい時期の溝であるが、その時期差はあまりないと考えられる。

溝—III

調査区の南を、溝—Iから約3.5m北をほぼ平行した状態で検出した溝である。

調査区内で、東北および南西部に途切れた状態で検出した。

巾は東北端では狭く約25cm、南西の広いところで約65cm、深さ12cm～15cmで、溝内の堆積は暗褐色土の単一層である。

溝内の暗褐色土層中から、須恵器片が出土したが細片で、時期の確定はできなかつた。

溝—I・II・IIIは、いずれも暗褐色土の単一の堆積が認められ、また出土遺物に6世紀後半から6世紀末期頃の須恵器片が出土していることから、時期差はあまりないと考えられる。またいずれも途中で断絶しているので、溝としての性格は不明である。

土壙—I

調査区の中央からやや南東部において検出した。溝-IIにより、北辺が切られた状態で検出した。

東西が約56cm、南北は溝-IIによって切られているため、41cmであるが、ほぼ円形に近い土壙である。

土壙は、褐色土の単一の堆積が認められた。

土壙の底近くから弥生時代後期の甕と壺の破片が出土した。

土壙—Iの性格は、貯蔵穴であるとも考えられる。

土壙—II・III

土壙—II・IIIは、調査区の北の東側において、切り合った状態で検出した。

土壙—IIは、短軸46cm、長軸1m22cm、深さ37cmの隅丸の長方形、舟底形の土壙である。土壙内は褐色土が堆積していたが出土遺物はなかった。

土壙—IIIは、短軸55cm、長軸1m20cm、深さ17cmの長階円形、舟底形の土壙である。土壙内は、土壙—IIと同一の褐色土が堆積しており、遺物は出土しなかった。遺構検出時においては、土壙II・IIIの切り合ひ関係等を明確にすることはできなかった。

両土壙とも、性格及び時期等は不明である。

井戸—I

井戸—Iは、調査区の中央部の西端近くで検出した。

西辺においては南北1m8cm、北辺が1m3cm、南辺92cm、東辺が北西から南東へ90cm、また西南から北東へ70cmの東辺で先尖りで、不成形の、形状である。底においても小さくしたような形で、検出した。深さは1m48cmである。

井戸—Iは、地山としている黄色粘土を堀抜き、下層の砂礫層に達している。この砂礫層は涌水層であり、検出時においても涌水が認められた。

井戸一I内は二層の堆積がみられ、上層は約30cmの暗灰色土層であり、この層中から弥生時代後期の土器及び古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。下層は約1m10cmの厚さで黒色土層の堆積が認められ、弥生時代後期の土器が出士した。

井戸枠等の痕跡は確認することができなかった。

時期としては弥生時代後期と考えられる。

柱穴

調査区ほぼ全域にわたり検出したが、中央部の西の井戸一Iの周辺においてはあまり検出することができなかった。

柱穴一Iは径38cmのほぼ円形で深さが10cmであり、他は約10cm～25cmの小さな円形の柱穴であり、深さ15～30cmである。

柱穴間の関連はみられず、建物として確認することができなかった。

柱穴からは、若干の土器細片が出土したが、明確な時期は不明である。

第4章 遺物

今回の調査により、出土した遺物は大きく分けて弥生時代後期の土器、5世紀後半から6世紀中頃にかけての須恵器である。この景はコンテナ箱に10箱である。

土器

いずれも弥生時代後期（畿内第V様式）の上器片である。なかでも甕片が圧倒的に多い。

壺

壺には、（図版III-11）のように、口縁部が外反しながら端部が上方に立ち上がり面をもった受け口状のもの、（図版III-1）のように外反しながら直に立ち上がる直口の壺がある。その他口縁部がくの字形に外反し、口縁端部に面をもち、円形浮文の付くものもある。

体部の外面は、ほとんど箝磨きが加えられている。

底部は、いずれも平底である。一部（図版III-22）のように底部の中心部に

くぼみをもつものもある。その他周囲をつまみあげて内を凹状にしたものもある。また粘土紐を貼り付け、脚台のようなものもある。

(図版Ⅹ—4) の平底の手すくね土器も出土している。

(図版Ⅹ—3) のような丸底壺をおもわせるものも出土している。

蓋

体部は、(挿図2—2)のような斜めの大きなタタキ目が施されている。また一部(挿図2—1)のように綾杉文状のタタキもみられる。

口縁部は、くの字形に外反し端部を丸くしている。また、(図版Ⅹ—15)のように端部に面をもち受け口状のものもある。

底部は、平底であり、(図版Ⅹ—23)のように凹みをもつものもある。また平底に、(図版Ⅹ—25)は1つ、(図版Ⅹ—24)は2つの穴をもつものがあり、瓶に使われたものも出土している。

高杯

今回出土した高杯は、破片ばかりで全体のわかるものはなかった。

杯部は、(図版Ⅹ—18)のように口縁部が曲折して立ちあがり、脚台は比較的短かいものが多い(図版Ⅹ—17)。脚柱上部は(図版Ⅹ—17)のように充実したもの、(図版Ⅹ—16)のように中空のものもある。脚の裾部は、(図版Ⅹ—20)のようにひらたくひろがったものが多く出土している。

須恵器

杯

(図版Ⅹ—7)のように立ち上りは直立して高く、端面の内傾度は著しくなり底部は丸味をもっている。その他、「陶邑古窯跡群I」のII期の立ち上りが低く底部が偏平なものが出土している。

蓋

蓋には、天井部はふくれて丸味をもち、口縁部は比較的高い「陶邑古窯跡群I」のI期の蓋が出土している。また蓋の天井部と体部とをわける稜線がにくくなつたII期の蓋が出土している。さらに中凹みのつまみも出土している。

高杯

(図版Ⅹ—8~10)は、有蓋高杯であり、杯部はやや内傾し、高い立ち上がりがあり、脚部は短い。(図版Ⅸ—8)のように長方形の透しと、(図版Ⅹ—9)のように円孔のものがあり、脚端部は上下に突出している。

甕

いずれも体部の破片であり、(挿図—1)のように平行タタキ、格子タタキ目がある。

第5章 結語

今回調査した地域は、中条小学校遺跡において北端の地域にあたり、駅前遺跡に接している所である。

遺構の時期は、弥生時代後期と古墳時代後期に大別することができる。

弥生時代後期の遺構としては、土壙—I及び井戸—Iである。土壙—Iが貯蔵穴としても考えることができる。井戸—Iとともに集落に関係する遺構であるので、今回調査地域の付近に弥生時代後期の集落の存在が十分予想される。

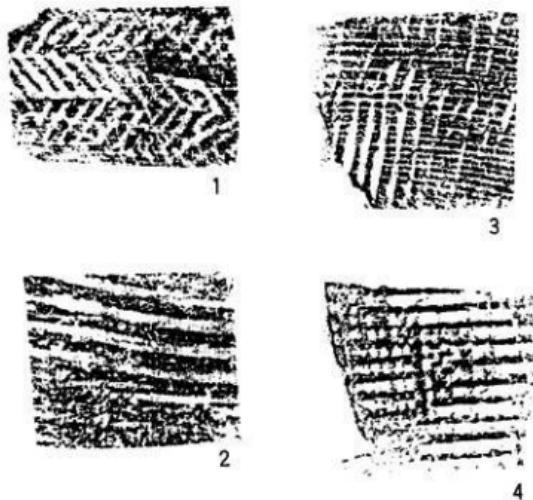
このことは、過去の中条小学校遺跡の調査とも符合している。中条小学校遺跡の立地している低位段丘から南へさがった所に広がっている弥生時代前期からの人集落である東奈良遺跡との関係も考えられる。

また、6世紀後半の古墳時代後期の遺構として明確なのは、溝—I・II・IIIの3条であるが、柱穴のなかにも古墳時代後期の時代のものもあると考えられるので、今回の調査地区においても古墳時代後期の集落の一部あるいは、付近に集落があると考えられる。今回の調査地域の北で、昭和55年に福祉文化会館の建設に伴って調査された駅前遺跡との関連も考えられる。

そのようなことから、今回調査が実施された地域は、中条小学校遺跡の北端、駅前遺跡の南端部分にあたり、両遺跡の集落の一部ではあるが、集落の端の様相を示している。

付近の今後の調査から、この地域のもつてゐる集落遺跡としての空間的様子が明らかになるとを考えられる。また中条小学校遺跡と駅前遺跡との関係及び、中

条小学校遺跡と東奈良遺跡、駅前遺跡と北方に隣接している上中条遺跡との関係も明らかになるであろう。また元茨木川の右岸に広がる各遺跡が解明され、茨木市南西部も明らかになっていくであろう。



插図一2

鮎川遺跡（86—1）

第1章 調査に至る経過

大三建設株式会社が、茨木市鮎川2丁目の茨木営業所及び倉庫を取り壊し、新たに営業所を兼ねた共同住宅の建設を計画された。

鮎川付近は、埋蔵文化財包蔵地としては知られていなかったが、大三建設株式会社の協力のうえ、「茨木市開発行為等に伴う埋蔵文化財保護指導要綱」により試掘調査を行うことになった。

試掘調査は、昭和61年4月11日実施した。その結果、須恵器片が出土したため「文化財保護法」第57条の5による「遺跡発見届」を大阪府教育委員会経由で文化庁に提出した。遺跡名を付近一帯の旧村名に因んで「鮎川遺跡」と命名した。

試掘調査の結果等を含めて、茨木市教育委員会と大三建設株式会社とが数回の協議を行い、今回の計画において、遺物出土が予想される建物計画地の北側、東西約7m、南北約12mの約85m²の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和61年6月12日から7月30日まで行った。その結果、試掘調査時においては不明であった包含層の堆積が認められ、溝及び柱穴も検出することが出来た。包含層は、約10cmの堆積であり、その層中に6世紀後半～7世紀の須恵器及び土師器が含まれていた。遺構も包含層の時期と同時期に比定されるものであった。

発掘調査終了後、7月1日から10月30日まで茨木市立文化財資料館において遺物整理作業を行った。

第2章 遺跡の環境

茨木市鮎川は、茨木市域の東南の部分にあたり、高槻市の西南と接し、茨木市の北部の老ノ坂山地に源をもつ安威川の中流左岸に位置している。

「鮎川」の地名は、文和元年2月18日の「総持寺領敷在田畠目録写」に「字北

垣内> 参段 鮎川村内 鮎川庄 修理田 平範行寄進」とあるのが初見で、南北朝期～室町期に見られる村名であり、摂津国鳴下郡のかなに入っている。また他に「鮎川荘」「鮎川宮神田」などがある。

この地名は江戸時代になると鳴上、鳴下郡になり、鳴上郡に属する部分は高槻藩領になり、鳴下郡に属する部分は、はじめ京都所司代板倉氏領、明暦3年旗本板倉氏知行、延宝年間幕府領、宝永3年からは仙洞領となる。

また「五畿内志」においても鳴上郡、鳴下郡の村里名に「鮎川」の名がみられ、「鮎川 半入鳴下郡」「鮎川 半入鳴上郡」とみられる。

明治時代からは、三島村であり、昭和23年に市町村合併により茨木市となる。

鮎川遺跡の南には、安威川、同じく左岸に河内渦に張り出すように日垣遺跡がある。日垣遺跡は、一部調査されただけでくわしくは不明であるが、弥生時代前期後半から中期の初めに成立した遺跡である。

鮎川の西側に流れる安威川の河床には、弥生時代、古墳時代、古代～中世の遺物の出土することが知られている。

鮎川遺跡の北の低位段丘上には、弥生時代後期から中世にかけての富田遺跡(高槻市)がある。同じ低位段丘上の西の茨木市總持寺には、弥生中期から中世の總持寺遺跡がある。

鮎川遺跡の西、安威川右岸には溝呪遺跡、牛札遺跡がみられる。

また近くに、鮎川の鎮守の須賀神社があり、そこには昭和53年に大阪府の天然記念物に指定された「くすの木」がある。

第3章 造構

今回の調査において、明褐色土層の包含層から6世紀中頃～7世紀にかけての土師器及び須恵器が含まれていることが判った。

調査地域の南西部に溝を検出し、その溝の東北部においてさらに他の溝及び柱穴を検出した。

溝一I

調査区を北西から南東に縦断するように検出した。

巾が4m60cm以上で、一方の岸は調査区外であるので不明である。深さは65cmである。おそらく上流の安威川の一主流の自然河道と考えられる。

溝内に、上層約20cmの暗灰色土層が堆積し、その下層に約45cmの灰色の少し粗い砂層が堆積しており、底は青灰色のシルト層になっている。

遺物は、上層約30cmの暗灰色土層から7世紀前半の須恵器の杯の蓋・身。土師器、甕、かまと型土器が出土している。

溝一II

調査区の西北端において西南から北東に縦断している。

巾が56cm、深さ5cmである。

溝内からの出土遺物がないので時期は不明である。

溝一III

調査区の北からやや東に向き、南へ折れ、中央部分近くで東へ流れている。

巾20cm、深さが10cmである。

溝からは、須恵器片、土師器片が出土した。その遺物から時期は7世紀半ばのものである。

「状に検出したことにより、区画するような溝であると考えられる。

溝一IV

調査区の北で、西から東へ横断している。西、東にとぎれている。溝一IIが交差している。

巾が37~10cm、深さが6~15cmである。

溝内からの出土遺物がないので時期は不明である。

溝一V

溝一IIIから派生するように東へという状態で検出した。また柱穴により切られている。

巾が50cm、深さが7cmの溝である。

溝内からの出土遺物がないので時期は不明である。

柱穴

径が約23cmと60~70cmの柱穴とに分かれる。

それぞれの柱穴内から、細庁であるが遺物が出土した。遺物には明らかな時期差がないので、柱穴の規模により時期が異なると考えられるが大きな時期差はない。

第4章 遺物

須恵器

杯

高台の付くもの(図版XXI-4)、高台の付かないもの(図版XXI-1、2、3)がある。(図版XXI-4)は、高台は厚く外部へふんばったようになり、脚端面がほぼ水平である。(図版XXI-1、2)は、体部と口縁部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。(図版XXI-3)は、底部は比較的丸味が残り、底部と体部の境は緩くカーブして稜がなく、体部は外反気味に開き、口縁端部は丸くおさめている。

蓋

(図版XXI-6、7、8)は、天井部は一段高くふくらみ、その部分をヘラ削りして、平らに仕上げている。口縁部の内部にかえりをもつ。

(図版XXI-9)は、宝珠つまみである。(図版XXI-10)は、大型で偏平なつまみである。

短頸壺

(図版XXI-5)は、いわいる薬壺型のもので、八字形に開いた高台の部分である。

土師器

杯

底部がほぼ水平なもの(図版XXI-11)、丸味をもつもの(図版XXI-12)がある。(図版XXI-11)は、体部はやや外反気味に開き、口縁端部はやや内傾し、内にやや肥厚したもの、体部内外面は横ナデ調整している。(図版XXI-12)は、体部が丸く内傾しながら外反し、口縁端部は丸くおさめ、内外面横ナデ調整している。

甕

(図版XXI-13、14)は、外反する口縁部に口縁端はナデにより面をなしてお

り、口縁部及び体部外面は粗い刷毛目、口縁部の内面は粗い横の刷毛目調整がされている。また(図版XXI-17、18)のように体部に付く把手も出土している。

(図版XXI-16)は、外反する口縁部に鈎のつくものである。

カマド型土器

(図版XXI-19)は、焚口の周縁に粘土を貼り付けて底としている。いわゆる「付け底系統」に属すると見られるカマド型土器である。

第5章 結語

今回の調査によって検出したのは、自然流路と考えられる溝及び小規模な溝4条と柱穴である。

出土遺物を概観すると、包含層及び造構から出土した土器は6世紀中頃から7世紀前半のものである。このことから調査は開発行為により発見された遺跡で、また調査面積が約85m²と小規模な調査であったが、鮎川一帯には7世紀半ばの時期には人々が生活していたことが判った。

溝-1から出土した7世紀前半の遺物の中にカマド型土器があり、その周辺で何らかの祭祀が行われたことがうかがえる。今回の調査を実施した結果、この周辺における鮎川遺跡の7世紀前半期の鮎川村のもつ重要性、当調査地域が集落内の位置を明らかにしていく重要な調査であること、またカマド型の用い方にも一つの資料を提供した。

当地域は、現在一部田畠として残っている所もあり、今後の開発時において、文化財保護とともに、発掘調査が実施されるなかで実態が明確になるとを考えられる。

牟礼遺跡（86—1）

第1章 調査に至る経過

茨木市中津町826 に辰己秀夫氏により店舗建設が計画された。計画地は、昭和60年度に調査された縄文時代晚期の井堰を伴う自然水路と水田が発掘された地区に隣接しているところから、茨木市教育員会と協議を行い、埋蔵文化財の確認のための調査を実施することになった。

第2章 遺跡の環境

牟礼遺跡は、阪急電鉄京都線茨木市駅の東にあたり、茨木市の南東部の安威川右岸に位置している。現在の茨木市中津町、園田町一帯にある。

また遺跡の北にある中村町の安威川の堤には、式内社である牟礼神社が鎮座している。また東には溝咲神社もあり、中世の時代に活躍した溝杭氏のゆかりの地でもある。

安威川の河床には、弥生時代～鎌倉、室町時代の遺物が散布している。牟礼遺跡から南へ2kmの安威川左岸には弥生時代前期から始まる目垣遺跡がある。

第3章 遺構

今回の調査により水田である可能性を有する土層を確認したにとどまった。

層位は、上から約30cmの盛土、その下に20～25cmの耕土、35～45cmの明黄色土層、75～90cmの砂層が堆積しており、この砂層には弥生時代～鎌倉、室町時代の遺物が含まれている。砂層の下に30～40cmの青灰色粘土層、その下に30cmの明黒色土層が堆積している。たま、その下は50cm以上の青灰色シルト層になっている。遺物は、砂層に含まれているだけであった。

暗黒色土層が水田と考えられるのは、昭和60年度の調査によって足跡が残されていた水田と同じ土層であり、井堰が作られた自然水路の左岸に位置し、近接していることからである。

今後、花粉分析、プラント・オパール分析等により調査を補っていかなければならぬと考える。

第4章 遺物

今回の調査により出土した遺物は、すべて砂層から検出したものである。

弥生式土器は、畿内第II～V様式の土器が出土している。古墳時代の遺物として、「陶邑古窯跡群I」のII～IV期の須恵器が出土している。

その他、土師皿、土師器の杯、甕が出土している。

平安時代後半から鎌倉、室町時代の出土遺物として、土師皿、瓦器、羽釜、磁器類が出土している。

遺物はいずれお細片で、磨耗の著しいものであり、流下してきたものと考えられる。

第5 結 論

今回の調査により、水田の可能性を有する土層を確認したにとどまったが、昭和60年度の調査から、明らかに縄文時代晩期に稻作を実証する調査成果から考え、付近一帯にも稻作が行われていたことが明らかになった。

今後の調査により、牟礼遺跡の実態が解明されていくであろう。

耳原遺跡（86—1）

第1章 調査に至る経過

大三建設株式会社が、茨木市耳原一丁目に建売住宅建設のための開発が計画された。

計画された地域は、今まで数度の発掘調査及び試掘調査により、縄文時代晩期から古代～中世の複合遺跡である耳原遺跡にあたり、遺構及び包含層が予想されたので、大三建設株式会社及び茨木市教育委員会と協議を行い、今回の計画地において試掘調査を実施することになった。

昭和61年4月24日に試掘調査を行った結果、耕土、床土の下、現地表下約30cmに弥生式土器を含む約10cmの茶褐色土層の包含層を検出した。

試掘調査の結果をふまえて、再び大三建設株式会社と茨木市教育委員会とが協議を行った。包含層が約10cmであるが検出されたことにより、遺構の存在も予想されるので、埋蔵文化財の包蔵に支障の生じないように配慮し、現状保存していただきたいとの茨木市教育委員会の申し入れに対して、大三建設株式会社が理解され、計画地に1m～1m20cmの盛土を行ない、建物の基礎の範囲を35cmとして施工することになった。しかし、下水に伴う掘削をしなければならない地域において、支障が生じると予想されたので発掘調査を実施することとした。

発掘調査は、昭和61年6月2日から調査を開始して、6月20日に終了した。ひき続き茨木市立文化財資料館で遺物整理作業等を行った。

第2章 遺跡の環境

耳原遺跡が所在する茨木市耳原一帯は、縄文時代晩期から平安～鎌倉時代にかけて遺物が出土している。

茨木市耳原は、市の北東部に位置し、南東に名神高速道路が通っている。また西南約1kmのところに名神高速道路の茨木インターチェンジがあり、そこか

ら派生するかのように、国道171号線及び府道高槻・大阪線が通過しており、茨木市の交通の要衝となっている。

遺跡は、老ノ坂山地から派生した低位段丘上の先端に位置し、その下を、北西1kmのところで勝尾寺川と合流した茨木川が段丘の裾を沿うように西から東へ流れている。

遺跡の位置している段丘の背後の北の山麓には、前期古墳である将军山古墳、5世紀から後期古墳へつながるであろう安威古墳群、後期の群集墳と考えられている真龍寺古墳があり、北摂古墳群の一画をなしている。遺跡の北端近くの茨木市耳原三丁目には、古墳後期の円墳で、両袖式の横穴式石室内部に、組合式家形石棺と割抜式家形石棺をもつ北摂地域では大型の耳原古墳がある。また耳原古墳西方200m地に、鼻壇古墳があり、付近の江戸時代の絵図においても古墳の石室の一部とみられるものが描かれている。そのことから付近の段丘上にも古墳がいくつかあったとも考えられる。

耳原の北には、旧耳原村のなかを西国街道が東西に通っている。

耳原は、摂津国鳴下郡にあたり、また鎌倉時代～室町期には莊園名として勝尾寺文書にもみたいだすことができる。

前記の勝尾寺川と茨木川の合流地の北の山麓には、阿為神社に合祀されている式内社である幣久良神社が鎮座していた。

第3章 遺構

今回の調査は、東西に巾約2m、長さ14mの第I調査区、その南15mのところに、巾約1m20cm、長さ約12m50cmの第II調査区を設けて行った。

第I調査区

調査区の東半に、土塁を2基検出した。

土塁—I

1辺が1m30cm以上の土塁である。土塁内から径50cm、深20cmの柱穴を検出した。

出土遺物なし。

土壙—I

1辺が1m20cmの土壙である。

出土遺物なし。

第II調査区

調査区の東端近くで、土壙1基を検出した。

1辺が70cmの土壙である。

出土遺物なし。

第4章 遺物

今回の出土遺物は、包含層のみの出土である。

出土遺物は、弥生時代中期の土器、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代から鎌倉時代の黒色土器・瓦器である。いずれも細片であった。

第5章 結語

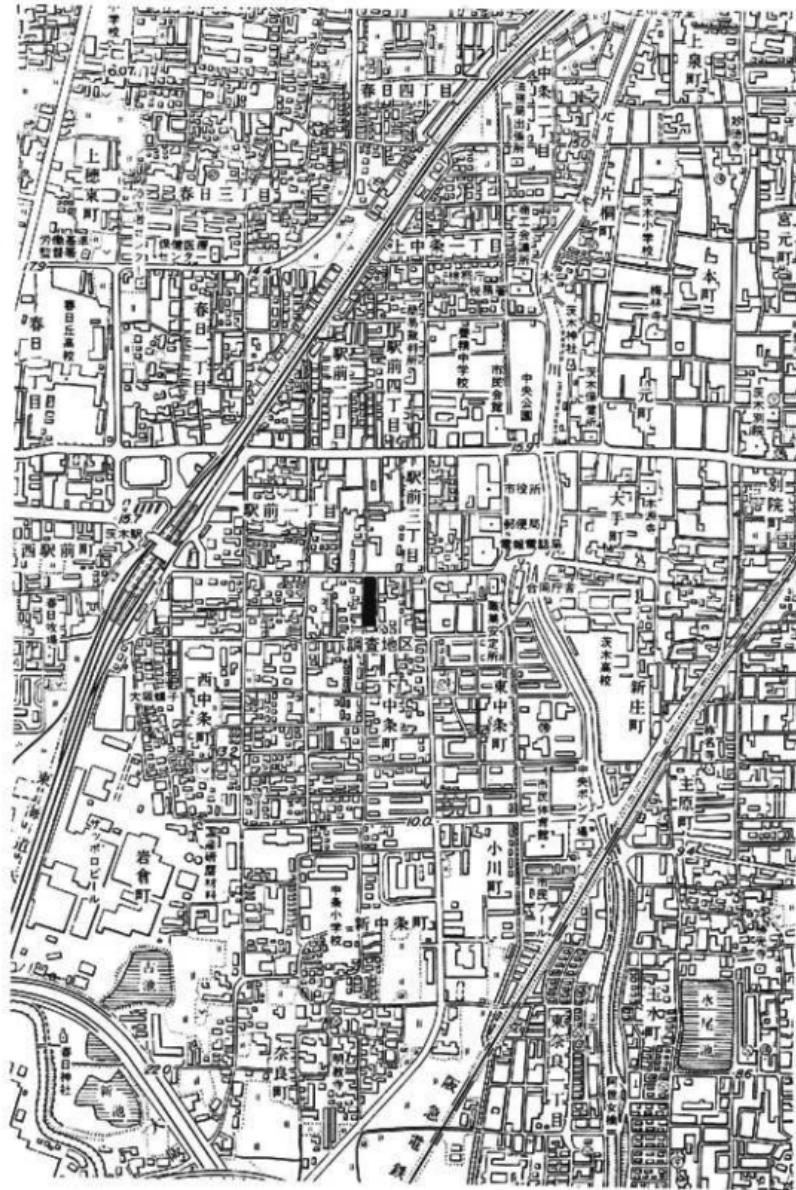
今回の調査は、小規模であったが包含層の堆積が認められ、一部であったが土壙3基が検出したことにより、当地域まで耳原遺跡が広がっていることが確認された。

図 版

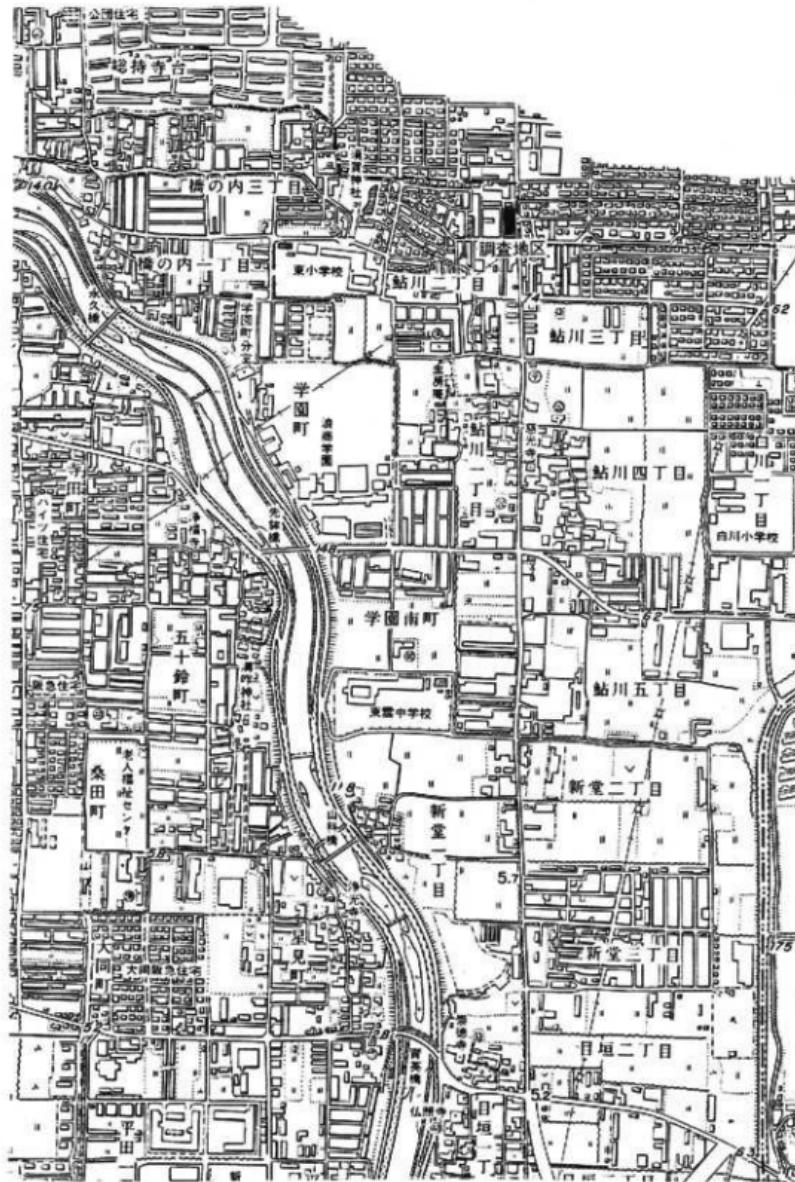
図版一 遺跡分布図



図版Ⅱ 中条小学校遺跡位置図



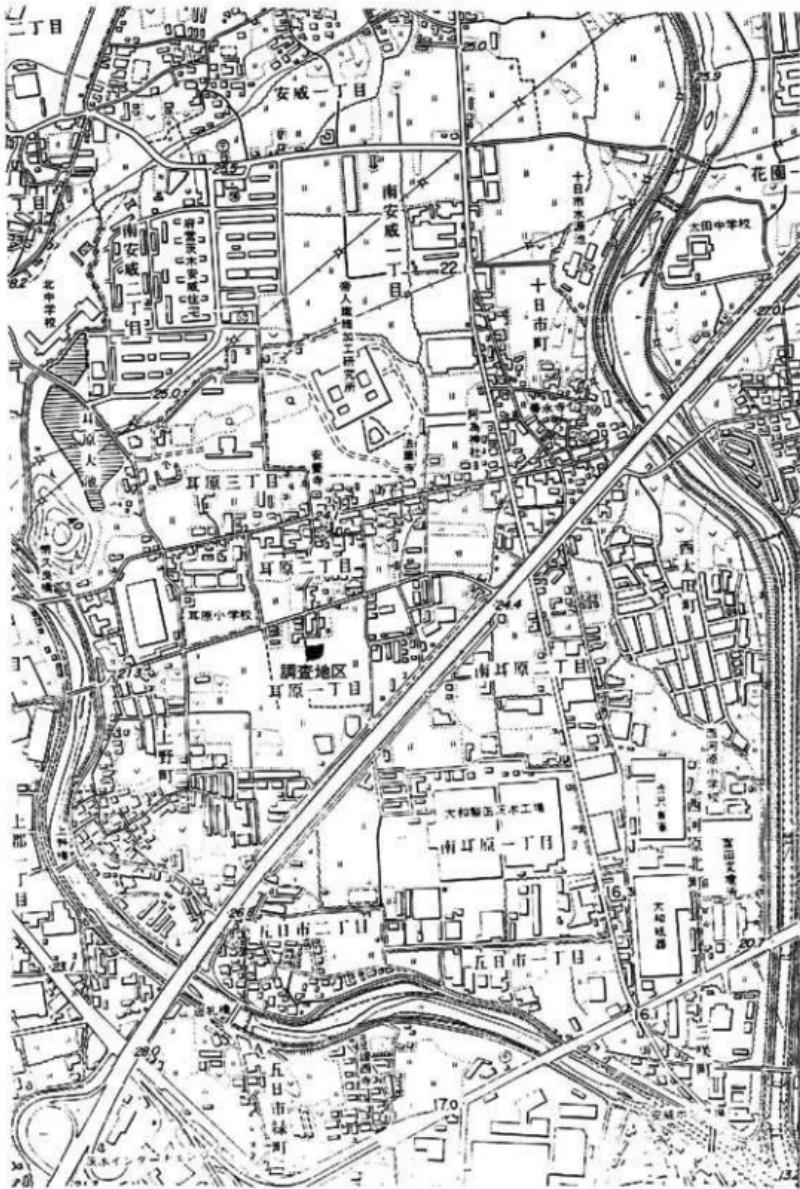
図版III 鮎川遺跡位置図



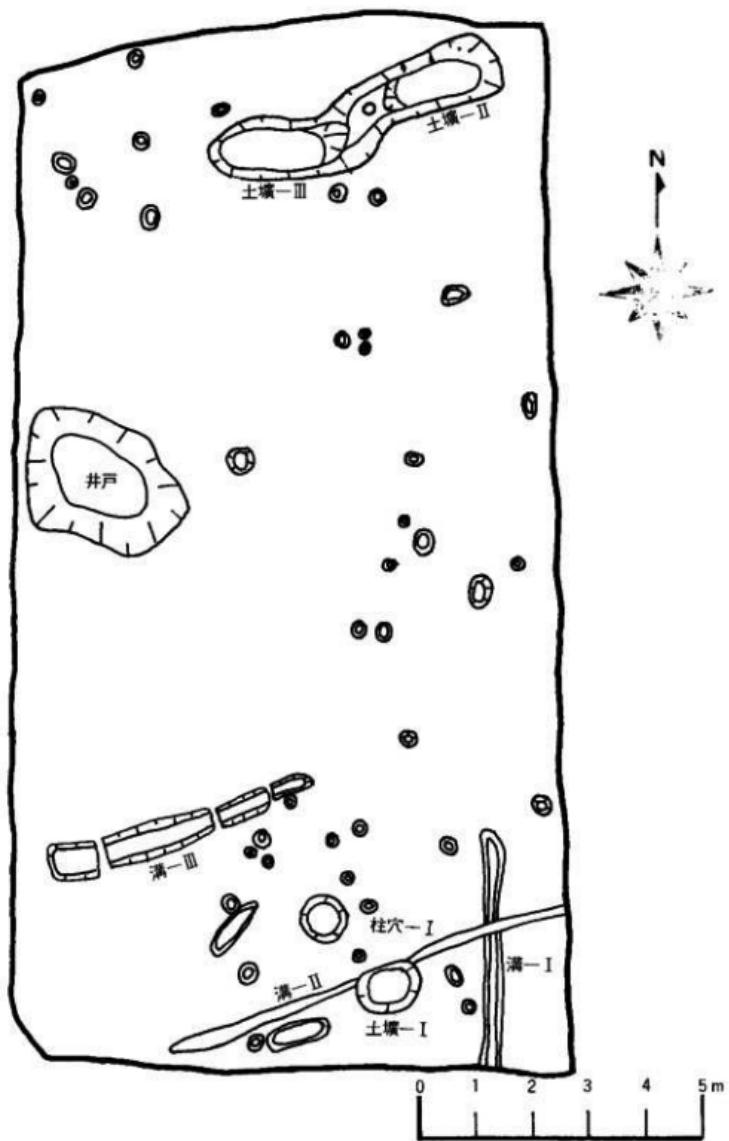
図版IV 牟礼遺跡位置



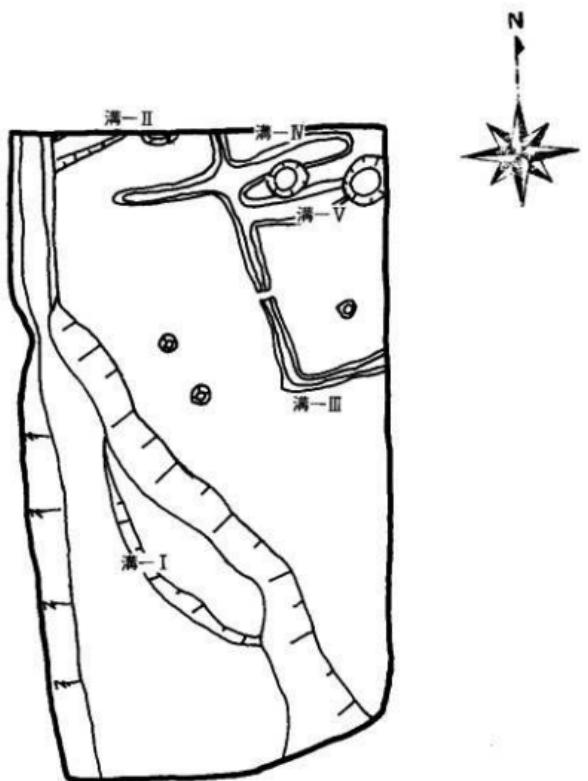
圖版V 耳原遺跡位置圖



図版 VI 中条小学校遺跡遺構図



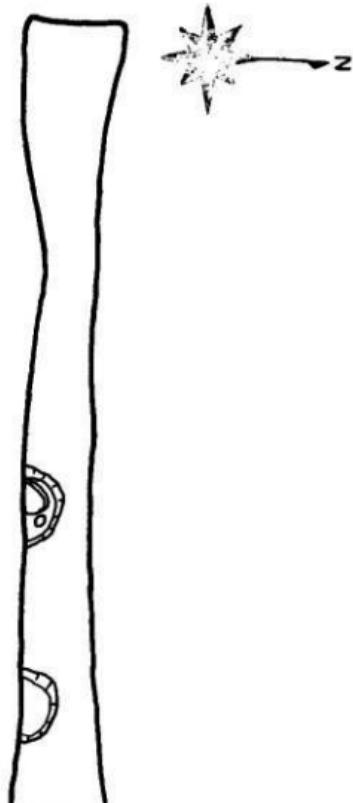
図版VII 鮎川遺跡遺構図



1 2 3 4 5m



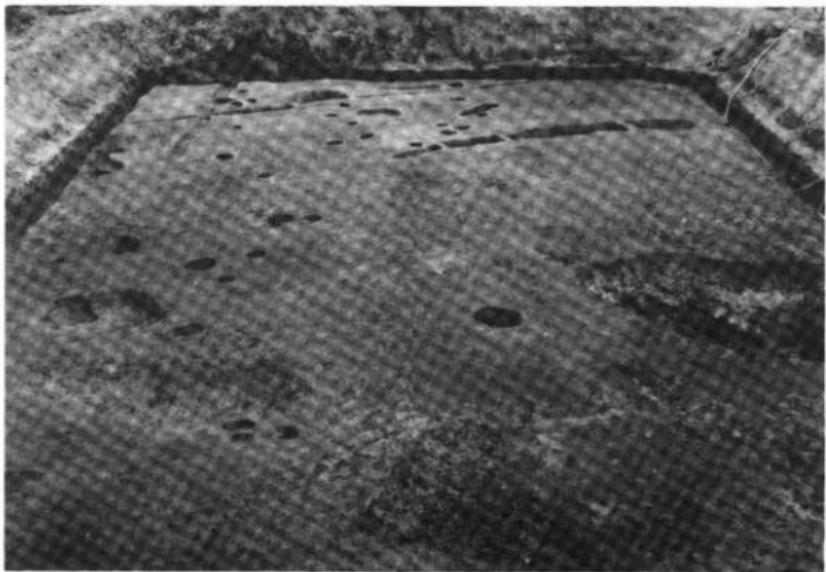
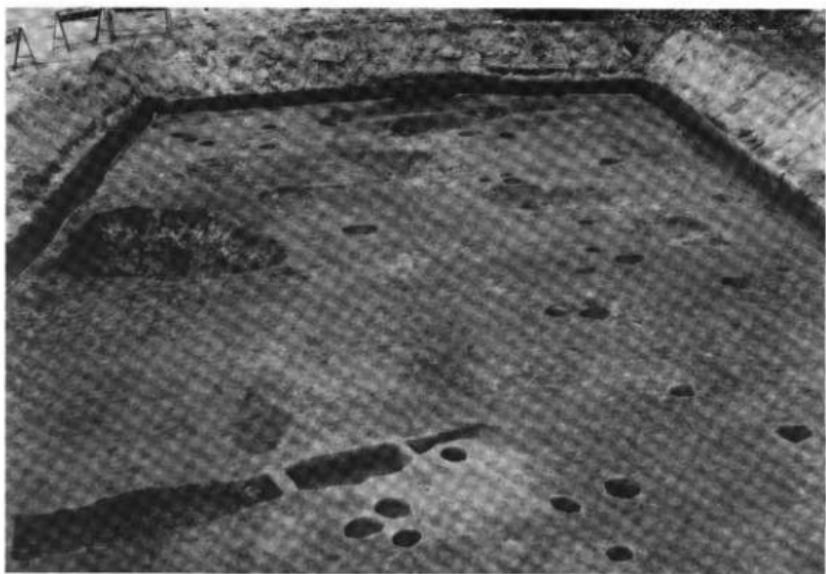
第Ⅱ調査区



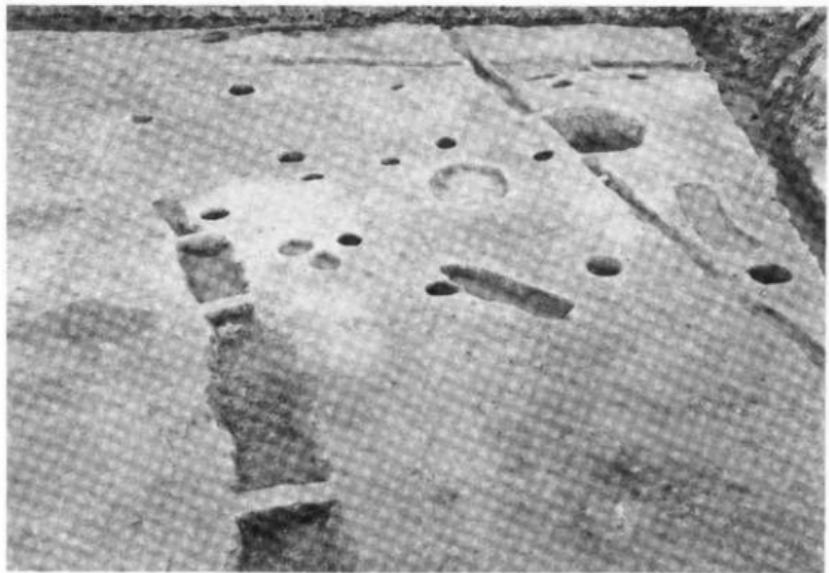
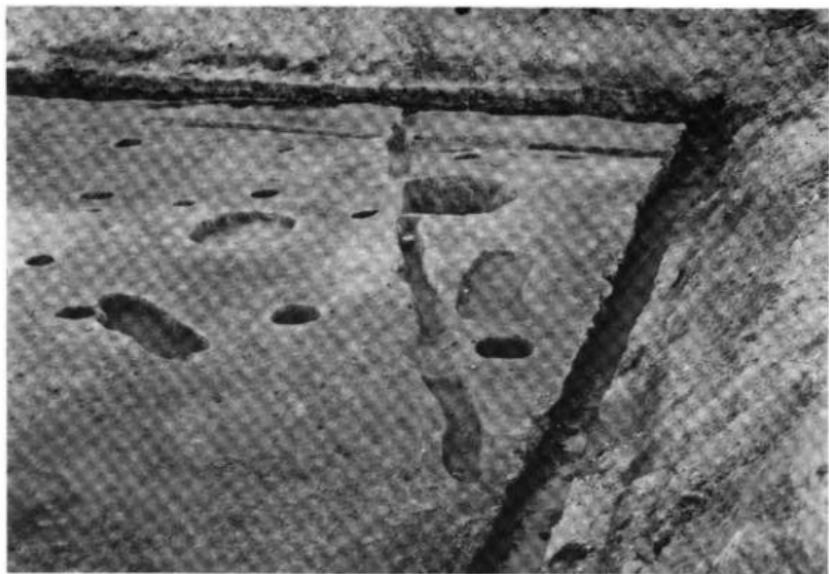
第Ⅰ調査区

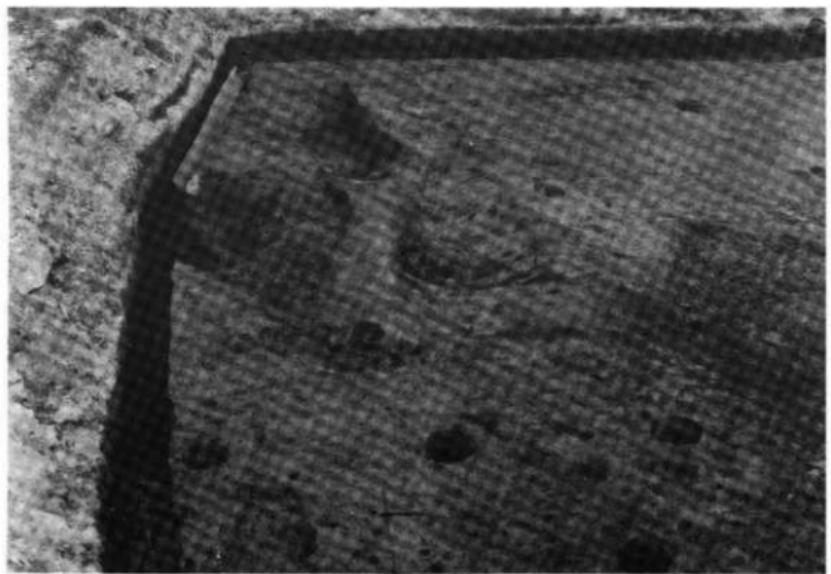


図版 K 中条小学校遺跡



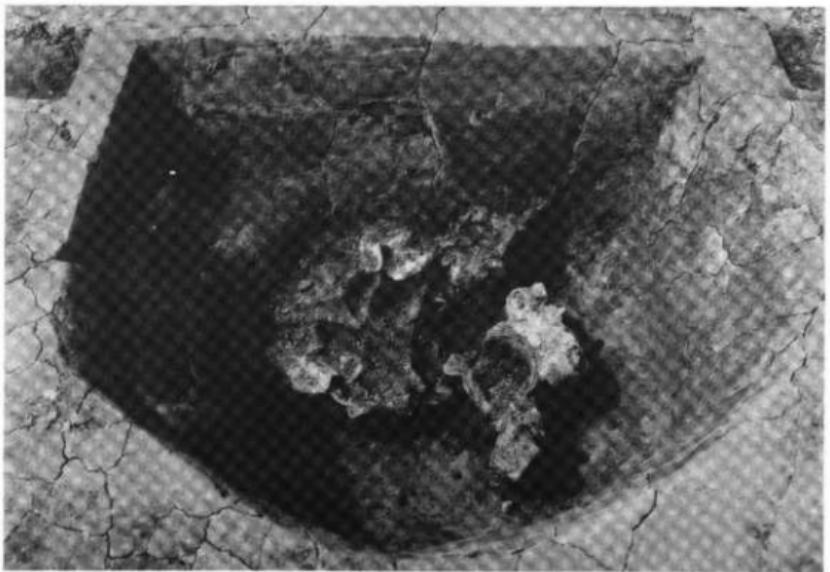
図版X 中条小学校遺跡





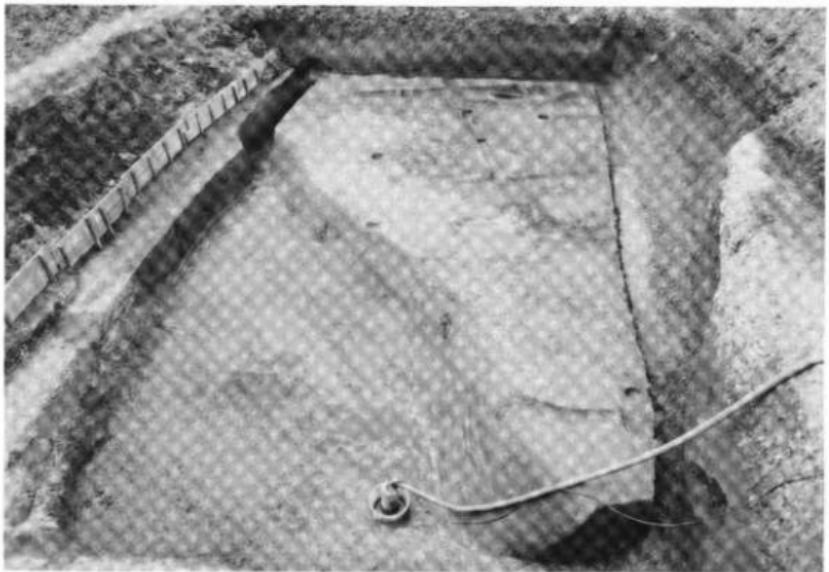


井戸

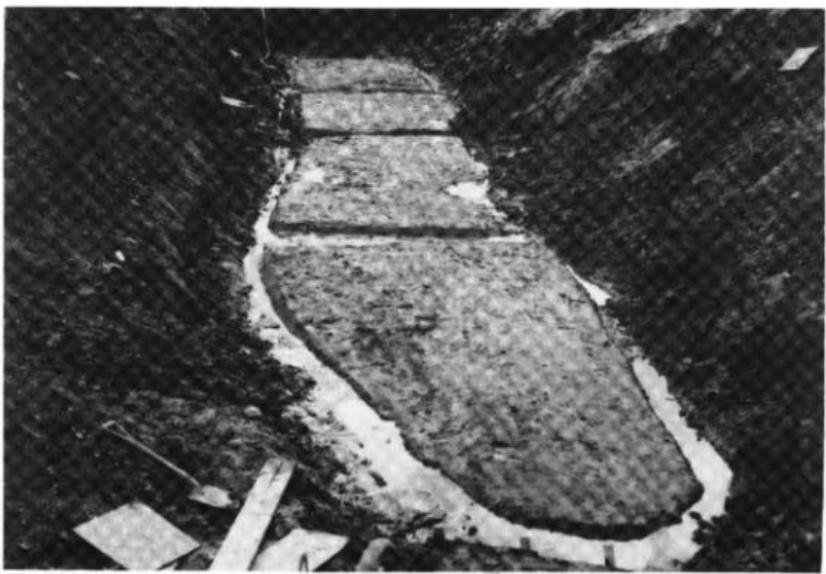


土塙—I

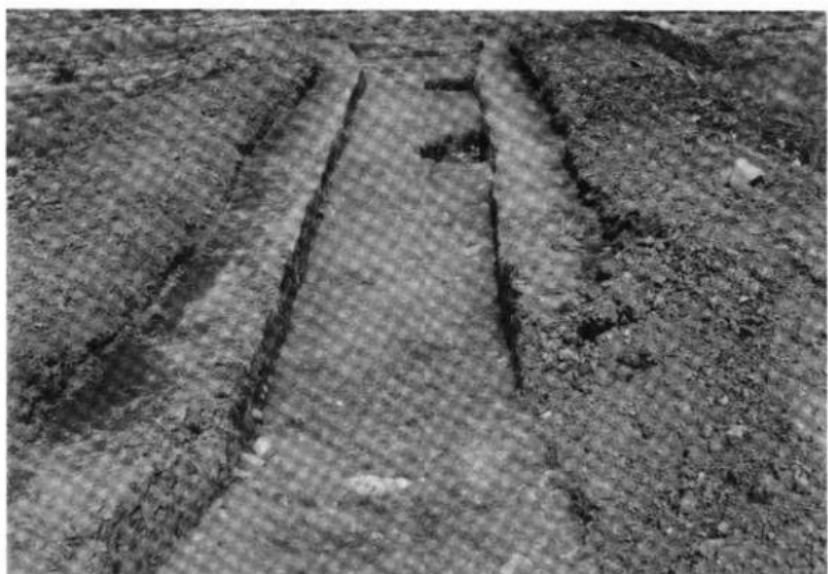
図版XII
鮎川遺跡



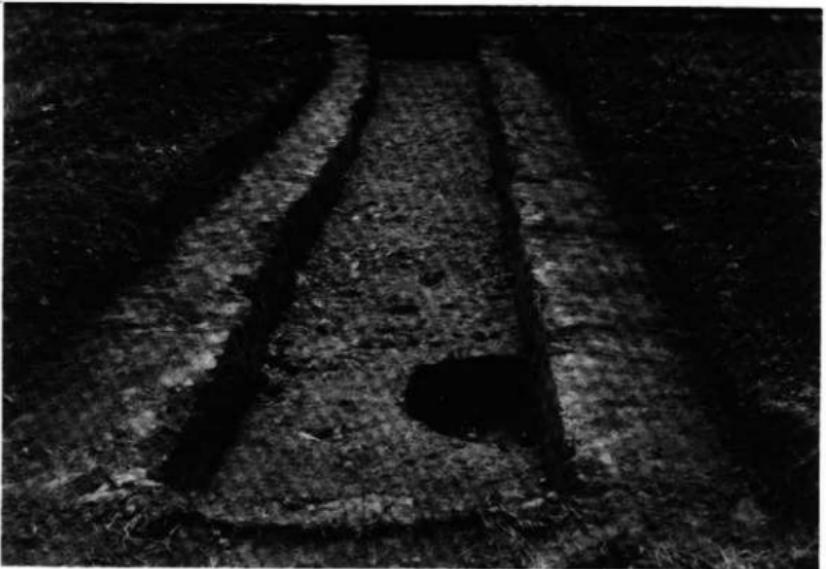
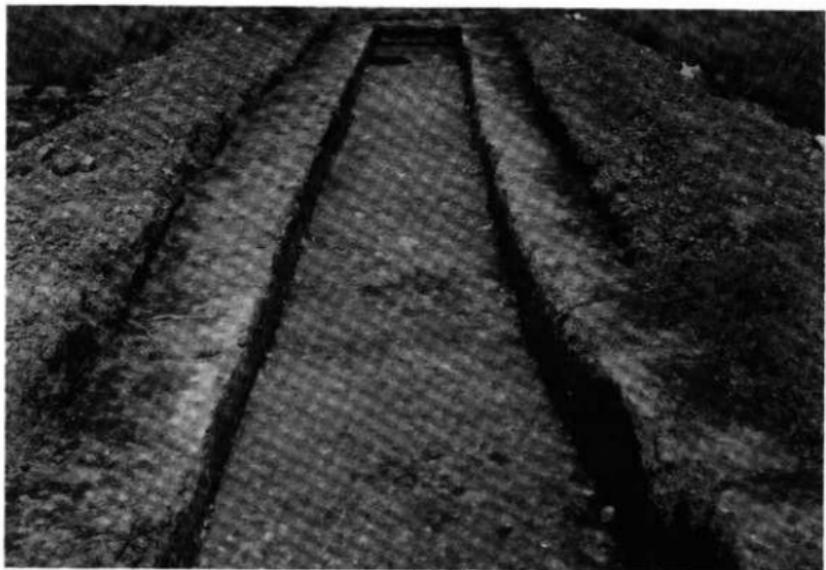


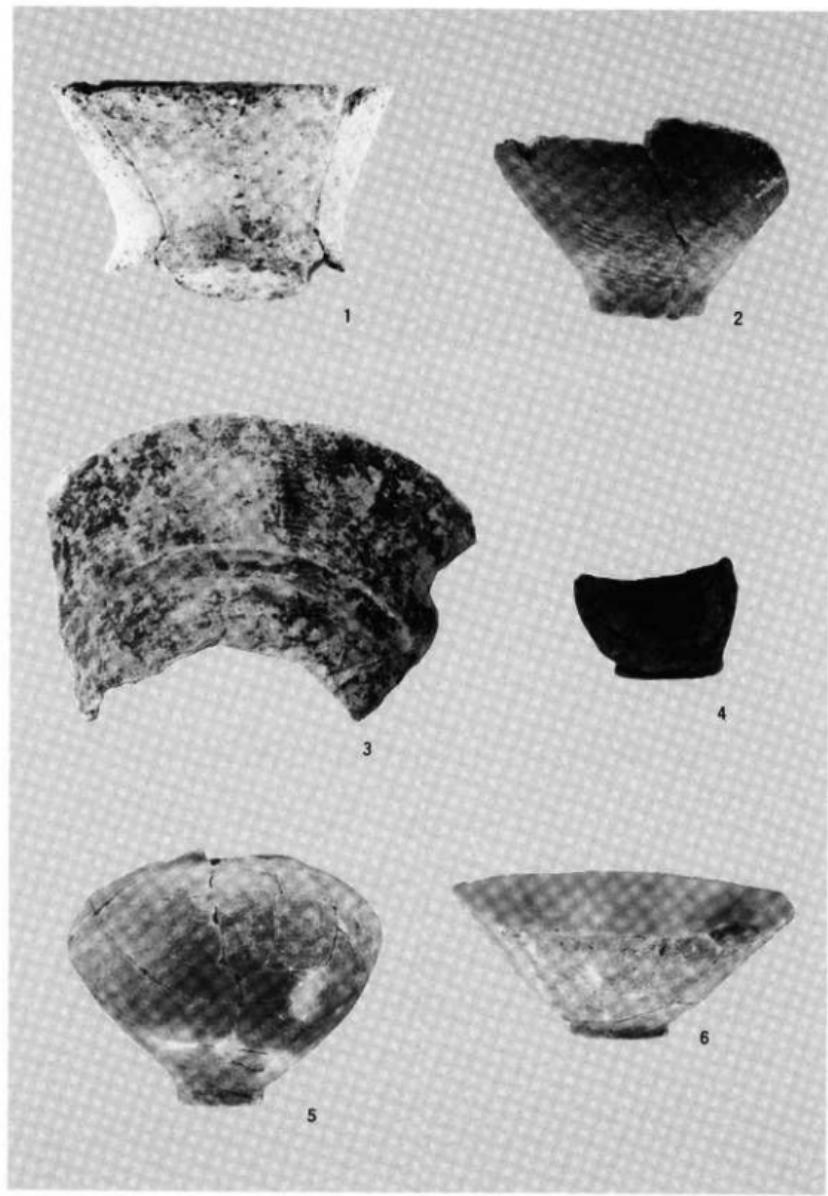


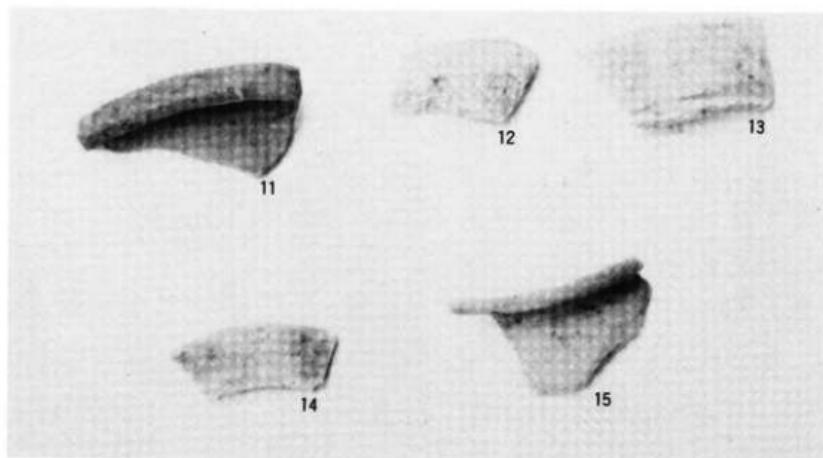
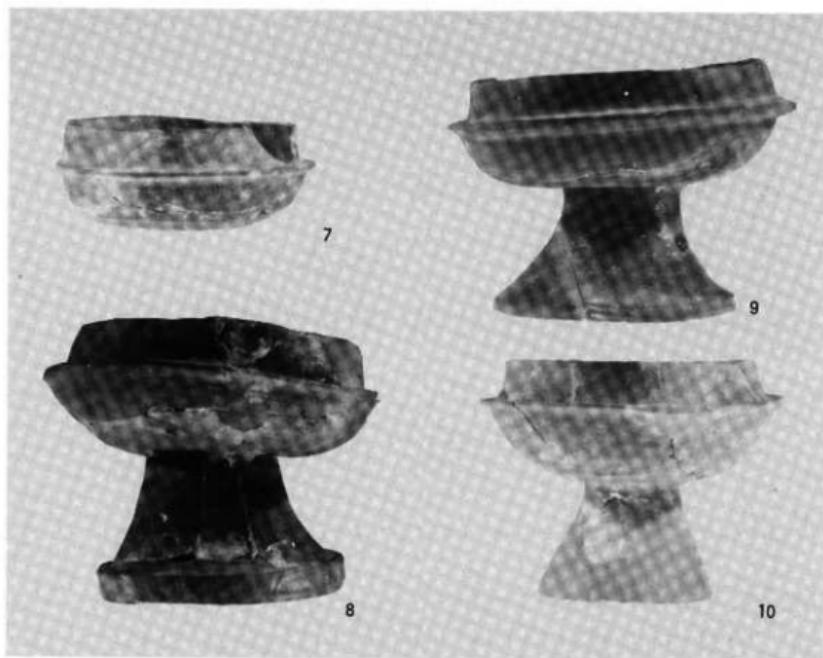
図版III 耳原遺跡（第一調査区）

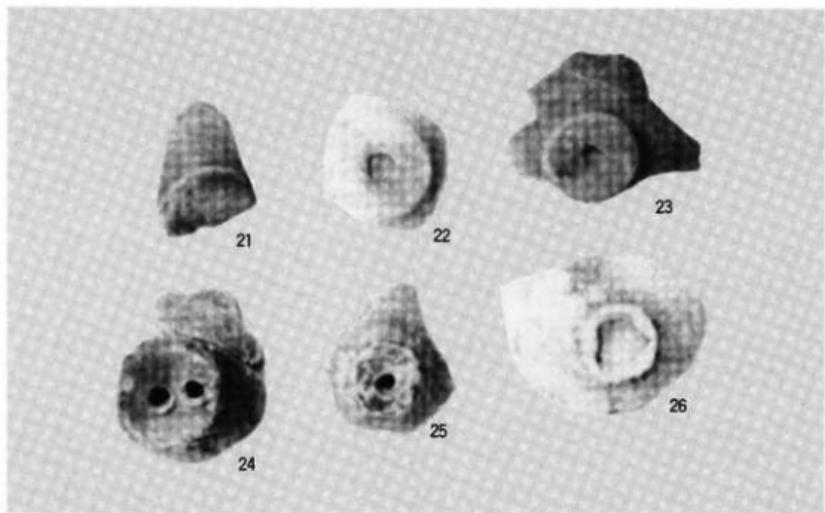
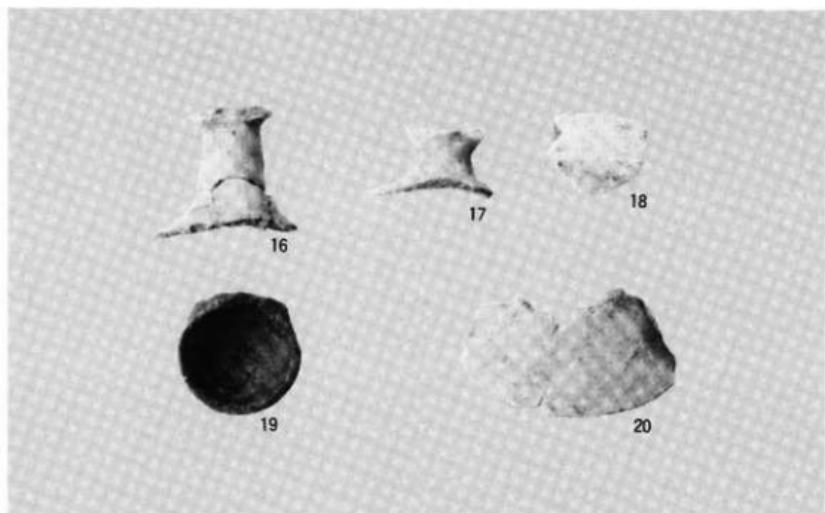


図版XXX
耳原遺跡（第II調査区）

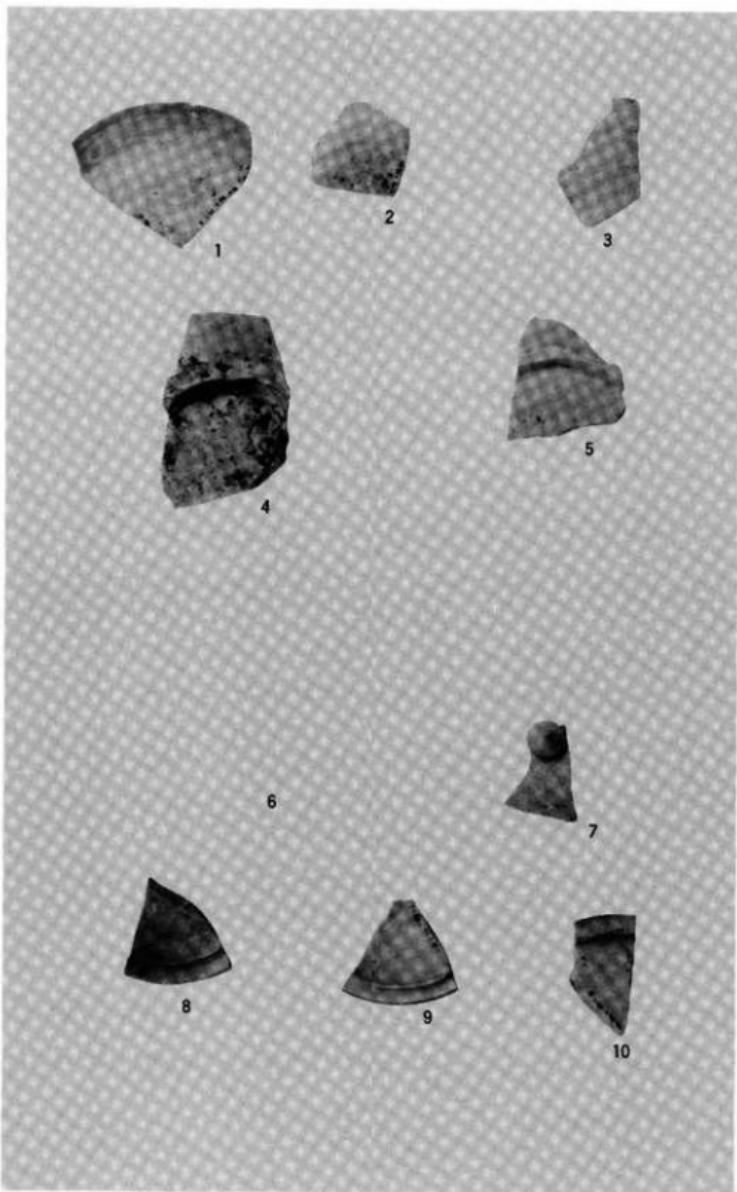




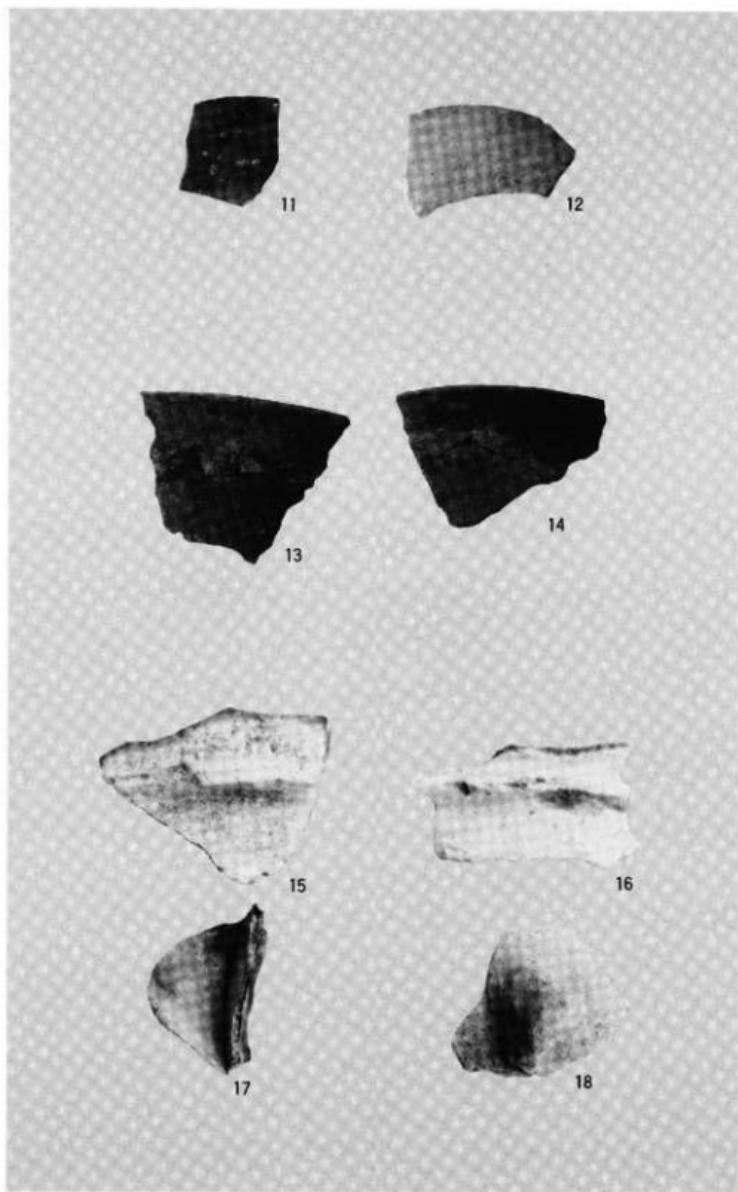


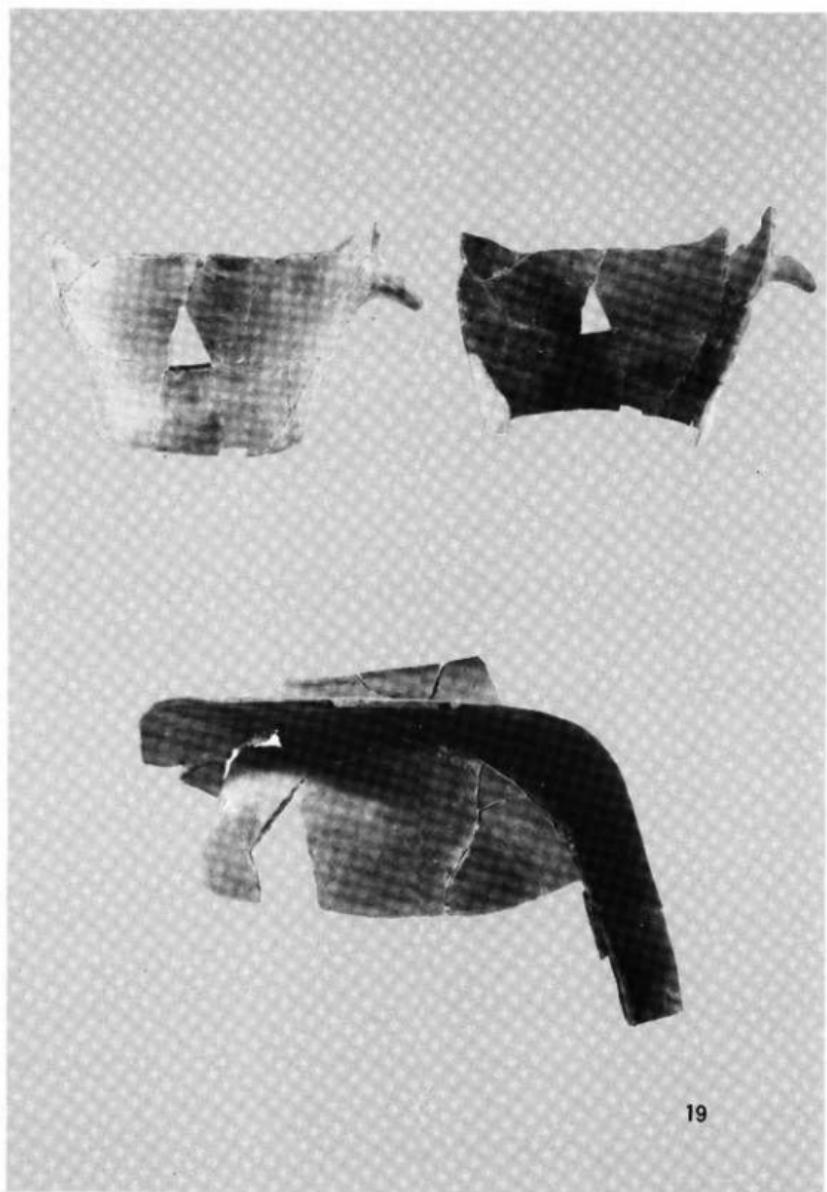


図版 XXI
鈴川遺跡出土遺物



図版 XII
鰐川遺跡出土遺物





昭和61年度 発掘調査概報Ⅱ

昭和 62年 3月 31日

発 行 茨木市教育委員会

印刷所 株)茨木教材社